蕎麦の常識非常識㉘

「天ぷらそばと三ツ矢サイダー」

ある童話作家のこと

日本三大そばといえば、岩手県の「わんこそば」、長野県の「戸隠そば」、そして島根県の「出雲そば」を指すのが一般的です。

夫々永い歴史を持ち、個性豊かな風味を持つことはもちろん、いずれも独自の器（うつわ）（注1）にそばを盛り付け提供する様式になっていて、日本のそば文化の一角に鮮やかな彩りを添えていることに異論はないでしょう。

戸隠・出雲そばについては別稿に譲るとして、ここでは本稿の主題である宮沢賢治の地元岩手県のそばについて触れておきたいと思います。

岩手県といえば、誰しも第一に思い起こすのが「わんこそば」でしょう。それほど「わんこそば」は岩手県の名産品として広く知られているのです。

「はい、じゃんじゃん、はい、どんどん」・・・たすき掛けのお姉（ねえ）さんのかけ声とともに椀の中に素早く投げ込まれるそばを次々と空けて行き、蓋を閉めるまで食べ放題という「わんこそば」は、独特の風情を醸し出す郷土性の強いそばの食べ方といえます。「椀子（わんこ）」とは小ぶりで主に朱色に塗られた椀のことで、この器に盛られたそばのことを「わんこそば」というわけです。

ともすれば「わんこそば」は、食べた椀の数を競う大食いイベントと考えがち

ですが、実は江戸時代の昔から南部地方（岩手県北部）には、秋の収穫時や祝い事があると、地主が小作人たちを大勢集めてご馳走する習慣があり、最後の酒盛りの後に「お立ち蕎麦」（お開きの意）を振舞い、「もっと食え、もっと食べろ」と攻め立てたと伝えられています。小さな椀に盛ることで一度に多数の人に行き渡るように工夫されたものなのです。

「わんこそば」の名前の由来については二説あって喧（かまびす）しいのです。

先ずは、江戸時代に南部氏二十七代の南部利直公が参勤交代で花巻に立ち寄られた折りに出された小椀に盛られたそばが大変気に入り、何杯もお代わりした事を由来とする花巻説。もう一つは、平民宰相と呼ばれた第十九代内閣総理大臣の原敬（たかし）が出身地の盛岡に帰省した際に小椀に盛られたそばを振る舞われ、「そばは椀こに限る」といったのが由来であるとする盛岡説が有力とされていますが、ここでは夫々の郷土愛が作り上げた物語としてご紹介するに留めておきましょう。

童話作家で詩人でもあり、同時に花巻農学校の教員で農民運動家でもあった宮沢賢治はこのような環境の中で生まれ育ちました。

「アメニモマケズ　カゼニモマケズ・・・」伝説によって、岩手県とりわけ花巻にとって宮沢賢治は余人に替え難い特別な存在なのです。それは花巻市役所が毎日流す時報（午前七時・正午・午後七時）のうち、午後七時は賢治が稗貫（ひえぬき）農

学校（花巻農学校の前身）の教員時代に作詞し、生徒が作曲したといわれる「精神歌（注2）」午後七時には「星めぐりの歌」（賢治作詞・作曲）のメロディーが現在も流されていることからも窺い知ることが出来ます。

しかし、その賢治が無類の蕎麦好きであったことは案外世間では知られていないようです。かくいう私も十数年前に花巻の老舗蕎麦屋・やぶ屋総本店を訪れた際に、ショーウインドウに賢治が愛したというメニュー「天ぷらそばと三ツ矢シャンペンサイダー」（「賢治セット」写真参照）が陳列されているのを見て初めて知った次第なのです。「天ぷら蕎麦とサイダー」という取り合わせの奇妙さもさることながら、天ぷら蕎麦が十五銭で、三ツ矢サイダーの方が八銭も高い二十三銭という値段の格差に歳月の流れを感じます。現在は、天ぷら蕎麦が九百八十円、三ツ矢サイダーは三百円で逆転しています。

賢治はやぶ屋が大のお気に入りで、「ブッシュへ行こう（やぶ屋に行こう）」というのが口癖であったと伝えられています、「ブッシュ」は英語で、「藪」を意味することは言うまでもないでしょう。また「一杯飲もう」というのもお酒ではなくサイダーのことだったようです。花巻農学校の先生方はビールを飲まずサイダーを飲むのが習性になっていた、とも伝えられています。

やぶ屋の創業は大正十二年ですが、賢治が教員になったのがその二年前の大正十年で、やぶ屋は当時としては珍しい二階建てで評判の店であったといいますから、ハイカラ好みの賢治が足繁く通っていたことは容易に想像できます。

また、やぶ屋のホームページを見ると、創業者の佐々木圭三氏（創業時二十一歳）は人付き合いの上手な人だったらしく、七歳年上の賢治に懐いていて、賢治が店に来ると「ああ賢治さんが来た」といって賢治の席に座り込んでよもやま話をするのが常だったとあります。

ところで、この話を聞いて一つだけ疑問が残りました。

賢治は禁酒主義者でしたので、ビールではなく流行のサイダーだったというのは納得なのですが、海老が入った天ぷら蕎麦がお気に入りだったということには菜食主義者であった賢治が？・・・と正直なところ疑問を感じました。ですが、賢治の菜食主義は頑なものでは必ずしも無く、時に応じて柔軟に対応していたとも言いますので、これ以上の詮索は止めることにします。

また食べ方も早く量も多かったようです。同僚だった教員達の証言を挙げておきましょう。「宮澤さんはとてもそば好きで、やぶ屋のお得意でした。食べるのも早くて、私が一杯食べるうちに、お代わりをして二杯は食べていました」、「奉仕のための労働が激しかったせいか食事もどちらかといえば量の多い方で、やぶ屋のそばを食べたりするときは相好をくずしていた」等々・・・

友人達の話によると、賢治のやぶ屋通いは相当なもので、学生や同僚を引き連れて行くことも度々だったようです。中にはこんな話もあります。「遠足の帰りのこと、夜も遅くなりやぶ屋も店を閉めていたのですが、店の入り口をどんどん叩いて店を開けてもらい。賢治が『どうも夜分遅くなってすみません。生徒をつれて来たのですが、有り合わせのものでも食べさせて下さい』と頼むと、やぶ屋の主人（佐々木圭三）もむしろ喜んで二階の座敷へ通してくれた」

賢治の懐具合も生涯で一番安定した（月給八十円・賞与百円）時期でもあり、元々お金に執着するタイプではない賢治のことですから、ありそうな話ですね。

これだけ蕎麦好きの賢治が自らの著作の中に直接蕎麦について書いたものが見当たらないのは不思議なことです。変幻自在の賢治のことですから「これもあり」なんでしょうね。

「アメニモマケズ」の詩の中にある「一日ニ玄米四合ト味噌ト少シノ野菜ヲタベ」ながら働く「サウイウモノニ　ワタシハナリタイ」という賢治には「天ぷら蕎麦と三ツ矢シャンペンサイダーを食べながらの談笑は、一時（ひととき）の贅沢を楽しみ憩う時間であり、人間関係を作るための格好の場であり、同時に蕎麦は彼の厳しい奉仕活動を支えるエネルギー源にもなっていたに違いありません。

＊注1　「戸隠そば」はご当地産の“根曲がり竹”を使った竹細工の笊に、「出

雲そば」は“朱塗りの丸形三段重”に盛られています。

＊注2　「精神歌」　賢治が最初に教員として赴任した稗貫郡立稗貫農学校（花巻農学校の前身）は岩手県立花巻高等女学校のちょうど隣り合わせにあり、花巻高等女学校に比べ規模・建物も貧弱だったので「クワっこ大学」と渾名されたそうです。賢治はこのような生徒達に自信を持たせようと精神歌や応援歌を作ったといわれています。